

『ラグ・シッターンタ・カウムディ』 譯註

(Laghusiddhāntakaumudī)

——パーニニ文典入門——

(3)

高崎直道

Ⅱ 子音の結合 (HAL-SAMDHĪ)

§. 1 ŚCUTVA-SAMDHĪ (前口蓋音化: Palatalization)

[No. 72] stoḥ ścunā ścuḥ. (viii, 4, 40)

s 音及び t 音類 (ta-varga: t, th, d, dh, n. すなわち TU) の代りに, ś 音及び c 音類 (ca-varga: c, ch, j, jh, ñ. すなわち CU) と結合する場合 (yoge), ś 音及び c 音類が代置される。 [例えば]

rāmaś śete (<rāmas śete, ラーマは臥す)

rāmaś cinoti (<rāmas cinoti, ラーマは集める)

saccit (<sat+cit, sat<sad, 存在と意識)

śārṅgiṅjaya (<śārṅgin+jaya, ヴィシュヌよ)

訳註 Sūtrapāṭha が Gen.+Inst.+Nom. という構成をもつ場合, この Inst. は ‘~と一緒に’ という意味を示す第三格 (sahārthe tritīyā) であり, 従って [yoge] あるいは [saṃnipāte] と補って解すべきものとされる。これは AC-samdhī の項でみられた Gen.+Loc.+Nom. という形式と比較するとき, Gen. で示される音類の代りに Nom. で示される音類が代置される点は同じであるが, Gen. で示される音類と Inst. で示される音類は, 何れが前にあっても差支えない点で異なる。例えば yajña<yaj+na のような場合も含まれる。

(例外)

[No. 73] śāt. (viii, 4, 44)
└ [na]⁴²[toḥ]⁴³[ścuḥ]⁴⁰

ś のあとにつづく場合, t 音類の前口蓋音による代置 (ścutva) はおこらない。

[例えば]

viśnaḥ (<viś+na, 光輝)

praśnaḥ (<praś+na, 質問)

§. 2 ṢṬUTVA-SAM̐DHI (反舌音化: Cerebralization)

[No. 74] ṣṭunā ṣṭuḥ. (viii, 4, 41)
 └ [stoh]⁴⁰

s 音及び t 音類の代りに, ṣ 音あるいは t 音類 [ta-varga: ṭ, ṭh, ḍ, ḍh, ṇ すなわち ṬU) と結合する場合, ṣ 音あるいは t 音類が代置される。[例えば]

rāmaṣ ṣaṣṭhaḥ (<rāmas ṣaṣṭhaḥ, 第六番目の者としてのラーマ)

rāmaṣ ṭikate (<rāmas ṭikate, ラーマは跳ぶ)

peṣṭā (<peṣ+ṭṛ, 砕くもの)

taṭṭikā (<tat+ṭikā, その註釈)

cakriṇ ḍhaukase (<cakriṇ ḍhaukase, Viṣṇu よ. 汝は近づく)

(例外 1)

[No. 75] na padāntāṭ ṭor anām. (viii, 4, 42)
 └ [stoh]⁴⁰[ṣṭuḥ]⁴¹

語末にある t 音類のあとにおいて, それに続く s および TU の代りに, ṣ および ṬU は代置されない。ただし, nām(gen, pl の格語尾)の場合を除く。[例えば]

ṣaṭ santaḥ (六人の善人)

ṣaṭ te (彼等六人)

何故 '語末にある' というのか? [例えば]

iṭṭe (<iṭ+te, 彼はほめる)

何故, TU のあとにおいて' というのか?

[例えば]

sarpiṣṭamam (<sarpiṣ+ṭama '最上のサルピス')

[No. 76] anām-navati-nagarīṇām iti vācyam.

(cf. Pat. ad. viii, 4, 42)

「[スートラに挙げる] nām の他に navati-,⁽⁹⁰⁾ nagarī-(都市) の追加が述べらるべきである。」[例えば]

ṣaṇṇām (<ṣaḍ+nām, 6 つの)

ṣaṇṇavatiḥ (<ṣaḍ+navati, 96)

ṣaṇṇagaryaḥ (<ṣaḍ+nagarī-, f. 六都連合)

訳註 nām の n は Augment であり (nuṭ: Pāṇ. vii, 1, 54), -ām に附属するとみなされる (Pāṇ. i, 1, 46)。従って TU 音類ではじまる要素であり, かつ nām の前では語幹は pada である。(Pāṇ, i. 4, 17; 18)

(例外 2)

[No. 77] toḥ ṣi. (viii, 4, 43)
 ↳ [na]⁴²[ṣtuḥ]⁴¹

ṣ 音があとにつづく場合, t 音類の反舌音による代置 (ṣtutva) はおこらない。

[例えば]

san ṣaṣṭhaḥ (第六なる)

§. 3 語末の音の変化

(a) 有声無気音化

[No. 78] jhalām jaśo 'nte. (viii, 2, 39)
 ↳ [padasya]^{15, 16}

語末において, JHAL (半母音, 鼻音を除く全子音) の代りに JAŚ (=j, b, g, d, d 有声無気音) が代置される。[例えば]

vāgīśaḥ (<vāk+īśa, ことばの神)

§. 3-(b) 鼻音化

[No. 79] yaro 'nunāsike 'nunāsiko vā. (viii, 4, 45)

語末にある YAR (h 以外の子音) の代りに, あとに鼻音 (anunāsika) がつづく場合, 任意に鼻音が代置される。[例えば]

etan murāriḥ (これを Viṣṇu が),

[あるいは]

etad murāriḥ (d<t, [No. 78])

[No. 80] pratyaye bhāṣāyām nityam. (cf. Vt. ad. viii, 4, 45)

「普通語 (bhāṣā すなわち Veda 以外の用法) においては, あとに [鼻音を頭音とする] 接尾辞がつづく場合, [YAR の代りに] つねに [鼻音が代置される。]

[例えば]

tan-mātram (<tad+mātra, d<t [No. 78], 唯)

cin-mayam (<cit+maya, 精神よりなる [もの])

§. 3-(c) 流音化

[No. 81] tor li. (viii, 4, 60)
 ↳ [parasavarṇaḥ]⁵⁸

t 音類 (=TU) の代りに, そのあとに l 音がつづく場合, 後の音 (l) と同類の音

が代置される。[例えば]

taḷ-layaḥ (その消滅, <taḷ+laya, d < t [No. 78]),
vidvāḷ likhate (<vidvān likhate, 智者は書く)。

[第二例では] n の代りに, 鼻音化した l [nasal l] [が代置される]。

§. 4 語末の音への同化 (pūrva-savarṇa-saṁdhi)

a) 'ud+sthā', 'ud+stambha' の例

[No. 82] udaḥ sthā-stambhoḥ pūrvasya. (viii, 4, 61)
└ [savarṇaḥ]⁵⁸

'ud' (Upasarga, [No. 43]) のあとにおいて, それに 'sthā-' および 'stambh-'
がつづく場合, [後者の s の代りに] 前者と同類の音が代置される。

訳註 sthā-, stambh- の 's の代りに' と解することが出来るのは, 次の規則
([Nos. 83, 84]) による。

[No. 83] tasmād iti uttarasya. (i, 1, 67)
└ [nirdiṣṭe]⁶⁶

第五格 (Ablative) による指示により行われる文法的操作 (kārya) は, 他の音に
よって距てられていない, すぐ後の [要素] に関するものと理解さるべきである。

訳註 このストラにより, Abl.= '～のあとで' の用法がきまる。[No. 17] の訳註
参照。sthā- あるいは stambh- のどの部分が操作の対象となるかについて, 次の規
則がある。

[No. 84] ādeḥ parasya. (i, 1, 54)
└ [alaḥ]⁵²

あとの [要素] に関して規定されたことは, その要素の頭音に関するものと知
らるべきである。従って, s (sthā-, stambh- の頭音) の代りに th が代置される。

訳註 このストラにより, ud+sthā-→ud+ththā- となるが, 更に次の規則があ
る。

[No. 85] jharo jhari savarṇe. (viii, 4, 65)
└ [halaḥ]⁶⁴ [lopaḥ]⁶⁴ [anyatarasyām]⁶²

子音のあとにくる JHAR (鼻音を除く KU~PU の五類の音 20, および sibilant 3
音) は, 同類の JHAR があとにつづく場合, 任意に省略される。

訳註 anyatarasyām は任意選択を示す語の一つ。従って, -d+thth-→-d+th-ある
いは -d+thth-. 前者は更に次の規則の適用をうける。

[No. 86] khari ca. (viii, 4, 55)
 └ [jhalām]⁵³[car]⁵⁴

KHAR (無声音) があとにつづく場合, JHAL (半母音, 鼻音以外の全子音) の代りに, CAR (=c, t, t, k, p; ś, ṣ, s. 無声無気音及び sibilant) が代置される。従って, 'ud' の d の代りに, t が代置される。[例えば]

utthānam (<ud+sthāna, 立上ること)

uttambhanam (ud+stambha, 支えること)

§. 4-(b) 語頭の h の場合

[No. 87] jhayo ho 'nyatarasyām. (viii, 4, 62)
 └ [pūrvasya]⁶¹[savarnaḥ]⁵⁸

JHAY (鼻音を除く KU~PU類の 20音)のあとにくる h の代りに, 先行する音と同類の音が任意に代置される。nāda, ghoṣa, samvāra(すなわち有声音)mahāprāṇa (有気音)のうち [hに] 最も近いのは各類の第四音 (有声有気音) である。[従って, 例えば]

vāg ghariḥ (<vāg+hari, g<k [No. 78].),

[あるいは]

vāg hariḥ.

§. 4-(c) 語頭の ś の場合

[No. 88] śaś cho 'ti. (viii, 4, 63)
 └ [jhayaḥ]⁶²└ [anyatarasyām]⁶²

JHAY のあとにくる ś の代りに, そのあとに AṬ (母音及びh, y, v, r)がつづく場合, 任意に ch が代置される。

[例えば] 'tad śiva' という場合, [tad の] d 代りに, 前口蓋音化 (ścutva, [No. 72]) によって j が代置されるとき, "khari ca" (Pāṇ. viii, 4, 55 [No. 86]) の規則により, この j の代りに c が代置される。[すなわち]

tac chivaḥ, [あるいは] tac śivaḥ.

訳註 チョーカンバ本は JHAY について, 'padāntāt' と規定するが, 他の二本にはない。そして Pāṇ. のスートラ自身にもその規定はない。

[No. 89] chatvam amīti vācyam. (cf. Pat. ad. Vt. ad. viii, 4, 63)

「[スートラは aṭi と規定するが] ch の代置は AM (AṬ の他に l と鼻音が加わる) があとにつづく場合に行われると言うべきである。」

[例えば]

tac-chlokena (<tad+slokena, その偈によって)

訳註 この [No. 89] の規定がないと l は AT に含まれないので、上の形はゆるされないことになる。

§. 5 m と m̄ (anusvāra-saṁdhi)

[No. 90] mo 'nusvāraḥ. (viii, 3, 23)
 ↳ [padasya]^{1, 16} [hali]²²

m で終る語の [mの] 代りに, HAL (子音) があとにつづく場合, Anusvāraが代置される。

[例えば]

harim vande (<harim vande, 私は Viṣṇu に頂礼する.)

[No. 91] naś cāpadāntasya jhali. [viii, 3, 24]
 ↳ [maḥ]²³ ↳ [anusvāraḥ]²³

語末でなくても, n と m との代りに, あとに JHAL (半母音, 鼻音以外の全子音) がつづく場合, Anusvāra が代置される。[例えば]

yaśāmsi (<yaśān+si, yaśas '栄光' の Nom., Acc., Pl.; n の添加, Pāṇ. vii, 1, 72)

ākraṁsyate (<ā-kram+syate '彼は征服するであろう')

何故 'JHAL があとにつづく場合', というのか? [例えば]

manyate (<man+yate).

[No. 92] anusvārasya yayi parasavarṇaḥ. (viii, 4, 58)

「Anusvāra の代りに YAY (h 及び sibilant を除く全子音) があとにつづく場合, 後の音と同類の音が代置される。」意味明瞭。[例えば]

śāntiḥ (<śāṁ+ti '静寂')

[No. 93] vā padāntasya. (viii, 4, 59)
 ↳ [anusvārasya]⁵⁸ [yayi]⁵⁸ [parasavarṇaḥ]⁵⁸

語末にある Anusvāra の代りに, YAY があとにつづく場合, 後の音と同類の音が任意に代置される。[例えば]

tvañ karoṣi [あるいは] tvam̄ karoṣi. (<tvam̄ karosi, m̄<m [No. 90], 汝は作る)

訳註 Ballantyne 本, ポンベイ本には, [No. 93] の Laghu. の説明なし。

[No. 94] mo rāji samah kvau. (viii, 3, 25)
 ↳ [padasya]^{1, 16}

KVIP (接尾語 v) で終る rāj (すなわち語根名詞として用いられた rāj) があとにつづく場合, sam (upasarga, [No. 43]) の m の代りに m 自体が代置される。[例えば]

samrāṭ (<sam+rāj, 支配者, 王)

訳註 rāj の j→ṣ→ṭ については, Pāṇ. viii, 2, 36 による。

KVIP とは -v という第一次接尾辞 (kṛt) のこと (K, P は IT) で, 語根に -v を加えると, その語根は語根名詞となる。(実際の形では -v は再び省略される。Pāṇ., vi, 1, 67). 従って kvibanta とは語根名詞の意。なおストラで 'kvau' とあるのは kvi の Loc. Sg. で, KVI は KVIP および KVIN の両者を含む。(共に接尾辞 -v) また K という IT (KIT) は要素の末尾に附される Āgama (添加音) を指示する。(Pāṇ. i, 1, 46. [No. 99]). PIT と NIT のちがいはアクセントのつく場所の相違を示す。

[No. 95] he ma-pare vā. (viii, 3, 26)
 └ [mah]²⁵[padasya]^{1,16}

m をあとに伴う h 音 (すなわち hm-) があとにつづく場合, [語末の] m の代りに, 任意に m [自体] が代置される。[例えば]

kim hmalayati [あるいは] kiṃ hmalayati (ṃ<m [No. 90], '何を彼はゆるがすか)

[No. 96] yavala-pare yavalā vā. (Vt. 1 ad viii, 3, 26)

「y, v, l をあとに伴う [h (すなわち (hy-, hv-, hl-) があとにつづく場合, 語末の m の代りに [鼻音化した] y, v, l が代置される。[例えば]

kiy hyaḥ [あるいは] kiṃ hyaḥ (<kim hyaḥ, ṃ<m [No. 90]' 何が昨日).

kiṅ hvalayati [あるいは] kiṃ hvalayati (何を彼はゆるがすか)

kiḷ hlādayati [あるいは] kiṃ hlādayati (何を彼はよろこばすか)

[No. 97] na-pare naḥ. (viii, 3, 27)
 └ [padasya]^{1,16}[mah]²⁵[he]²⁶[vā]²⁶

n をあとに伴う h 音 (すなわち hn-) があとにつづく場合, [語末の] m の代りに, 任意に n が代置される。[例えば]

kin hnute [あるいは] kiṃ hnute. (<kim hnute, ṃ<m. [No.90], 彼は何をかくすか)

§. 6 添加音を伴う音韻結合 (āgama-saṃdhi) (1)

[No. 98] ḍaḥ si dhut. (viii, 3, 29)
 └ [padasya]^{1,16}[vā]²⁶

prāñ śaṣṭhaḥ (<prāñ śaṣṭhaḥ; prāñ<prāñc, 東 nom. sg)

2) sugaṇṭh śaṣṭhaḥ ([No. 101])

sugaṇṭ śaṣṭhaḥ ([No. 100])

sugaṇ śaṣṭhaḥ [<sugaṇ śaṣṭhaḥ; sugaṇ- 算数に巧みな)

訳註 kuk, tuk は何れも KIT. ([No. 99] 参照) 従って antāvayava.

Vārttika においても、人名の Gen. があれば、その規則は、任意選択とみなされる。

Ballantyne 本, NSP 本は [No. 100] の Pāṇ. の規則の説明は省いて、単に 'vāstah' ([kuk, tuk の添加は] 任意である) とのみ説明し、更に [No. 101] の Vārttika を欠く。従って用例の中、prāñkh śaṣṭhaḥ, sugaṇṭh śaṣṭhaḥ はのせていない。なお、上掲の Pauṣkarasādi の意見による追加は, vathsaḥ/vatsaḥ, kṣīram/kṣīram, aphsarāḥ/apsarāḥ のような場合に関する。

[No. 102] naś ca. (viii, 3, 30)
 ↳ [padasya]^{1,16}[si]²⁹[dhuṭ]²⁹[vā]²⁶

n で終る語のあとにくる [語頭の] s には任意に dh が添加される。 [例えば] san tsaḥ [あるいは] san saḥ (<san+saḥ; san<sat, √as の現在分詞)

訳註 san tsaḥ は現在普通には sant saḥ とかくが, TIT の定義によれば, 上掲の如くすべきである。

[No. 103] śi tuk. (viii, 3, 31)
 ↳ [padasya]^{1,16}[naḥ]³⁰[vā]²⁶

語末の n には、あとに ś がつづく場合、任意に t (TUK) が添加される。 [例えば]

sañ chambhuḥ (ñ<n [No. 72], ch<ś [No. 88])

sañc chambhuḥ tuk ([No. 103]; t→c [No. 72], [No. 72, 88] 以下上に同じ)

sañc śambhuḥ ([No. 103], [No. 72], [No. 72])

sañ śambhuḥ (n→ñ [No. 72])

(<san śambhñḥ; śambhu, Śiva の異名)

[No. 104] ṅamo hrasvād aci nityam. (viii, 3, 32)
 ↳ [padasya]^{1,16}

短母音のあとにくる NAN (=ñ, ṅ, n) を以て終る語のあとに母音がつづく場合、その母音にはつねに NAM (順次に ñ, ṅ, n) が添加される。 (NAMUT) [例えば]

pratyañ nātmā (<pratyañ ātmā; pratyañ<pratyañc)

sugaṇ nīśaḥ (<sugaṇ īśaḥ)

san nacyutaḥ (<san acyuta)

訳註 NAMUṬ (=ñut, nuṭ, nuṭ) は ṬIT であるから ādyavayava. これは近代の文法で鼻音の重複といわれる方則。

§. 7 “RU” に関する方則 (RUTVA-saṁdhi)

[No. 105] samaḥ suṭi. (viii, 3, 5)
 ↳ [padasya]^{1,16}[ruḥ]¹

動詞前接辞 ‘sam’ [のm] の代りに、添加要素 s (SUṬ) の前において、“ru” が代用される。

訳註 “ru” とは、[No. 105] 以下の規則にのべられるような変化をする音を意味する。

[No. 106] atrānunāsikaḥ pūrvasya tu vā. (viii, 3, 2)
 ↳ [padasya]^{1,16}[ruḥ]¹

この RU に関する節 (ru-prakarāṇa, viii 3, 1-12) においては、“ru” の前の[母音] の代りに、任意に鼻母音 (anunāsika) が代置される。

訳註 [No. 106] の規則は adhikāra-sūtra.

[No. 107] anunāsikāt paro ’nusvāraḥ. (viii, 3, 4)
 ↳ [padsya]^{1,16}[ruḥ]¹

鼻母音を代置しない場合、“ru” の前の [母音の] あとに、anusvāra が添加される。

訳註 スートラの ‘anunāsikāt’ を Laghu. は、‘anunāsikam vihāya’ と説明する。Kāśikā は、anunāsikāt [anyat] と補って解釈すべしとする。

[No. 108] khar-avasānayoṛ visarjanīyah. (viii, 3, 15)
 ↳ [padasya]^{1,16}[raḥ]¹⁴

KHAR (無声音) があとにつづく場合、及び、Avasāna (休止) においては、語末の r 音(r または “ru”)の代りに、visarga (ḥ) が代置される。

[No. 109] saṁ-puṁ-kānām so vaktavyaḥ. (cf. Vt. 1 ad. viii, 3, 12.)

「san, puṁ および ‘kān’ (Pāṇ. viii, 3, 12.) の [鼻音の] 代りに、s が代置されることが述べらるべきである。」

[例えば]

saṁsskartā [あるいは] saṁsskartā (<sam+(s+karṭṛ), 祭祀の執行者)

訳註 以上 [Nos. 105-109] の適用例として、ここに sam+s+karṭṛ があげられている。その変化過程を図示すると下のようになる。

- a) 1 sam+(s+kartṛ-)
 2 (sa+“ru”)+(s+k°) [No. 105] m→“ru”
 3 (sañ+“ru”)+(s+k°) [No. 106] a→añ
 4 (sañ+s)+(s+k°) [No. 109] “ru”→s.→sañsskartā
- b) 3 (sa+m+“ru”)+(s+k°) [No. 107] m の添加
 4 (sa+m+s)+(s+k°) [No. 109]→saṃsskartā

この a), b) の両形は、更に [No. 85] (重複する s の省略) の適用により、別に a') sañskartā, b') saṃskartā という形をもつ。(sañs+kartā)

なお, suṭ の添加 (sam+(s+kartṛ.) < sam+kartṛ) については, Pāṇ. vi, 1, 135 ~157 参照。[No. 108] は, [No. 109] の Vārttika の補説により, 上の例においては適用されない。

[No. 110] pumaḥ khayy am-pare. (viii, 3, 6)
 ↳ [padasya]^{1,16}[ruḥ]¹

AM (母音, 半母音および鼻音) をあとに伴う KHAY (sibilant を除く無声音全部) があとにつづく場合, 'pum' [のm] の代りに, “ru” が代置される。[例えば]

puṃskokilaḥ ([Nos. 110, 106, 109]),

puṃskokilaḥ ([Nos. 110, 107, 109]).

(<pum+kokila, ‘雄のコーキラ鳥’)

[No. 111] naś chavy apraśān. (viii, 3, 7)
 ↳ [padasya]^{1,16}[am-pare]⁶[ruḥ]¹

AM をあとに伴う CHAV (=c, ch; t, ṭh, t, th) があとにつづく場合, n で終る語の [最後の n の] 代りに, “ru” が代置される。[ただし, praśān を除く。]

[No. 112] visarjanīyasya saḥ. (viii 3, 34)
 ↳ [padasya]^{1, 16}[khari]¹⁵

KHAR (無声音) の前において, visarga (visarjanīya) の代りに s が代置される。

[例えば]

cakriṃs trāyasva ([Nos. 111, 106, 112])

[あるいは]

cakriṃs trāyasva. ([Nos. 111, 107, 112])

(<cakrin trāyasva. 王よ, 汝は守れ)

何故 ‘apraśān’ (No. 111) というのか? [例えば]

praśān tanoti (寂靜者が払がる, 顕現する)

何故 ‘語末の’ (cf. nāntasya padasya, [No. 111]) というのか? [例えば]

hanti (<han+ti, 3. sg. of √han 殺す)

訳註 [No. 112]の規則は, viii, 3, 15([No. 108])に対する apavāda で, [No. 108]の条件のうち, 'khari' という条件の場合は, 直ちにこの規則の適用をうけて s が代置され, ḥ という形ではのこらないことになる(r→ḥ→s)。[khari] の anuvartana は, viii, 3, 15以後断えてなく, ここではじめて使用される。(文典家のいう maṇḍūkagati, '蛙跳び') なお, Ballantyne 本は, Laghu. の説明としては 'khari' という条件のみをあげ, スートラの説明は省く。

[No. 113] nṛn pe. (viii, 3, 10)
└ [padasya]^{1, 16}[ruḥ]¹[vā]²

nṛn (nṛ, m. '人' の Acc. Pl.) という語形の [-nの] 代りに, p があとにつづく場合, 任意に "ru" が代置される。

[No. 114] kupvo ḥk-ḥpau ca. (viii, 3, 37)
└ [visarjanīyasya]³⁴

k 音類 (KU) および p 音類 (PU) があとにつづく場合, visarga の代りに, [それぞれ]ḥk (jihvamūliya) および ḥp (upadhmāniya) が代置される。[ただし] 'ca' と [スートラ中に] あるから, visarga のままでもよい。[例えば]

nṛṃḥ pāhi ([Nos. 113, 106, 108, 114]),

nṛṃḥ pāhi ([Nos. 113, 107, 108, 114]),

nṛṃḥ pāhi ([Nos. 113, 106, 108]),

nṛṃḥ pāhi ([Nos. 113, 107, 108]),

nṛn pāhi (<nṛn pāhi, 人々を守れ)

[定義] āmreḍita ;—

[No. 115] tasya param āmreḍitam. (viii, 1, 2)

二回重複された語の, 後のものが āmreḍita (重複語) とよばれる。

[No. 116] kan āmreḍite. (viii, 3, 12)
└ [ruḥ]¹

'kān' の n の代りに, あとに āmreḍita がつづく場合 (すなわち 'kān' がくりかえされる場合), "ru" が代置される。[すなわち]

kāṃskān ([Nos. 116, 106, 108, 113])

kāṃskān ([Nos. 116, 107, 108, 112])

(<kān kān, 誰と誰とを?)

§. 8 Āgama-samdhī (2)

[No. 117] che ca. (vi, 1, 73)
 └ [hrasvasya]⁷¹[tuk]⁷¹

ch があとにつづく場合, 短冊音に t (TUK) が添加される。 [例えば]

śivac-chāyā ((<śiva+chāyā. [Nos. 117,117, 72], シヴァの影)

[No. 118] padāntād vā. (vi, 1, 76)
 └ [dīrghāt]⁷⁵[che]⁷⁵[tuk]⁷¹

ch があとにつづく場合, 長母音で終る単語のあとに, 任意に TUK が添加される。 [例えば]

lakṣmīcchāyā [あるいは] lakṣmīchāyā (吉祥天の影)

以上, 子音結合の規則 (HAL-SAMDHĪ) 終り。

IV Visarga に関する規則 (VISARGA-SAMDHĪ)

訳註 以下で取扱われるのは, visarga が, 他の音韻と結合するに際しての変化であるが III. (HAL-SAMDHĪ) において説明されたものとして, [No. 108] khar-avasānāyor visarjanīyaḥ (viii, 3, 15) 及び [No. 112] (viii, 3, 34) が記憶さるべきである。[No. 108] のうち avasāna (休止) の場合は, ここでは扱われない。KHAR があとにつづく場合は, [No. 112] をはじめとして, 以下述べられるような諸規則の適用をうける。まず, 次に [No. 112] が再録される。

[No. 119] visarjanīyasya saḥ. (viii, 3, 34)
 └ [padasya]^{1, 16}[khari]¹⁵

KHAR があとにつづく場合。(訳は前掲, No. 112). [例えば]

viṣṇus trātā (<viṣṇuḥ trātā ‘救護者ヴィシュヌ’)

[No. 120] vā śari. (viii, 3, 36)
 └ [visarjanīyasya]³⁴[saḥ]³⁴

ŚAR (sibilant) があとにつづく場合, visarga の代りに, 任意に visarga が代置される。(すなわち, V° はそのまま存置されてもよい)。[例えば]

hariḥ śete [あるいは] hariś śete (s→ś [No. 72])

(ヴィシュヌは臥す)

[No. 121] sa-sajuṣo ruḥ. (viii, 2, 66)
 └ [padasya]^{1, 16}

語末にくる s および sajuṣ- という語の [最後の音 ṣ の] 代りに, “ru” が代置される。

[No. 122] ato ror aplutād aplute. (vi, 1, 113)
 ↳ [ut]¹¹¹ [saṃhitāyām]⁷²

Pluta でない a のあとにくる “ru” の代りに，あとに pluta でない a がつづく時，u (短音) が代置される。〔例えば〕

śivo 'rcyaḥ (崇拜すべきシヴァ。 <śivas arcyāḥ. s→“ru” [No. 121], “ru”→u [No. 122], a+u→o [No. 31], a の Lopa [No. 52])

[No. 123] haśi ca. (vi, 1, 114)
 ↳ [ato]¹¹³ [roḥ]¹¹³ [aplutād]¹¹³ [ut]¹¹¹ [saṃhitāyām]⁷²

Pluta でない a のあとにくる “ru” の代りに，HAŚ (有声音) があとにつづく場合，u が代置される。〔例えば〕

śivo vandyāḥ (讃えるべきシヴァ， <śivas vandyāḥ. [Nos. 121, 123, 31])

訳註 at……apluta. ‘pluta でない a’-[No. 58] (Pāṇ. viii, 2, 84) の規定の如く，ã が Vocative において Pluta となる場合もあるから，その場合を排除するために ‘apluta’ という条件が附加されている。‘at’, ‘ut’ の t については [No. 30] taparas tatkālasya (i, 1, 70) 参照。

[No. 124] bho -bhago- agho-apūrvasya yo 'śi. (viii, 3, 17)
 ↳ [padasya]¹⁵⁻¹⁶[roḥ]¹⁴

これら (bho-, bhago-, agho- および -ã) に先だたれる “ru” の代りに，AŚ (母音及び有声音) があとにつづく場合，y が代置される。〔例えば〕

devā iha (y の lopa. [No. 34] viii, 3, 19), [あるいは] devāy iha

bhos, bhagos, aghos は s で終る nipāta ([No. 62] 訳註参照) である。これらの [末尾の] “ru” (s→“ru” [No. 121]) の代りに，y が代置された場合，

[No. 125] hali sarveṣām. (viii, 3, 22)
 ↳ [padasya]^{15, 16} [yaḥ]¹⁷[lopaḥ]¹⁹

bho-, bhago-, agho- および -ã に先だたれる [語末の] y は，HAL (子音) があとにつづく場合，無音化する (lopa)。〔例えば〕

bho devāḥ.

bhago namas te.

agho yāhi. (おお，来れ)

訳註 スートラ中の ‘sarveṣām’ は viii, 3, 18 (Śakaṭāyana), 19 (Śakalya), 20 (Gārgya) のあとをうけ，‘全ての学匠の意見に従えば’ の意。

[No. 126] ro 'supi. (viii, 2, 69)
 └ [ahan]⁶⁸[padasya]^{1, 16}

‘ahan’ という語の末尾の n の代りに, r (repha) が代置される。ただし, 格語尾 (SUP) があとにつづく場合を除く。〔例えば〕

ahar ahaḥ (<ahan+ahan, 日々に)

ahargaṇaḥ (<ahan+gaṇa- 一連の日)

訳註 スートラの ro (<raḥ) は ra- の nom. sg.。[No. 126] は, それに先行する スートラ : ahan (viii, 2, 68) に対する apavāda で, viii, 2, 68 は ‘ahan の語末の n の代りに, “ru” が代置される’ というのに対し, ‘SUP の前以外の場合は r が代置される, という。Laghu. はこの r を repha と解するが, Vt. は “ru” の場合も考慮している。(ahaḥ patih/ahar patih) 実例からみれば, “ru” も repha も含まれるが, Pāṇini は Laghu. の解釈の如く, ここでは repha のみを考慮したのではあるまいか。さもなければ, ‘asupi’ という限定は生かされない。SUP があとにくると “ru” が代置されるということは, いわゆる pada-ending の前における, n→“ru”→u [No. 123] という変化の場合をさす。(ahan+bhyām→ahobhyām)

[No. 127] ro ri. (viii, 3, 14)
 └ [padasya]^{1, 16}[lopaḥ]¹⁸

〔語末の〕 r (repha) は, そのあとに r (repha) がつづく場合, 無音化 (lopa) する。

訳註 raḥ は, ここでは r- の gen. sg.。r を Laghu. は repha と解するが, 次の実例に徴すると, スートラ の原義においては, “ru” も含まれている。

[No. 128] ḍh-ra-lope pūrvasya dīrgho 'ṇaḥ. (vi, 3, 111)

無音化された ḍh および r (repha) に先行する AN (=a, i, u) の代りに, 長音が代置される。〔例えば〕

punā ramate (<punar ramate かれは再びたのしむ)

harī ramyaḥ (<haris ramyaḥ, s→“ru” [No. 121] ヴィシヌは美しい)

śambhā rājate (<śambhus rājate. シヴァはかがやく)

何故 ‘AN の代りに’ というのか。〔例えば〕

trḍhaḥ (<trḍh+ḍhaḥ, ḍh の Lopa, おしつぶされた)

vṛḍhaḥ (<vṛḍh+ḍhaḥ 増大した)

‘manas rathaḥ’ とある場合, [先ず] “ru” による代置 (rutva, [No. 121]) が行われ, [次に] “haśi ca” (Pāṇ. viii, 3, 14, [No. 123]) の適用によって, “ru” の代

りに u が代置され, [他方] “ro ri” ([No. 127]. viii, 3, 14) の適用によって, [r の] 無音化ともなる場合,

[No. 129] vipraṭiṣedhe paraṃ kāryam. (i, 4, 2)

等しい力をもつ規則が [相互に] 矛盾する場合, [Aṣṭādhyāyī における順序の] 後のものが有効である。従って, 無音化が成立するが, “pūrvatrāsiddham” ([No. 35] viii, 2, 1.) という規定に従って, “ro ri” という規則は成立しないから, u による代置 (utva, (No. 123)) のみが [有効である]。[そこで]

manorathah (好ましい)

[No. 130] etat-tadoḥ su-lope 'kor anañ-samāse hali (vi, 1, 132)

k 音を伴わない (akakāra) etad- 及び tad- の格語尾 “su” (-s, nom. sg.) は, 子音があとにつづく場合, 無音化される。ただし, 否定辞 a を伴う合成語 (nañ-samāsa) の場合を除く。[例えば]

eṣa viṣṇuḥ

sa śambhuḥ

何故 ‘k を伴わない’ (akah) というのか? [例えば]

eṣako rudrah (<eṣakas rudrah, [Nos. 121, 123, 34])

何故 ‘否定辞 a を伴う合成語の場合を除く’ というのか。[例えば]

asaḥ śivaḥ (<asas śivaḥ, [No. 108]. 別形として, asaś śivaḥ, [No. 120]. asaḥ, 存在しない) 何故 ‘hali’ というのか? [例えば]

eṣo 'tra. (<eṣas atra, [Nos. 121, 122, 34, 52])

[No. 131] so 'ci lope cet pādapūraṇam. (vi, 1, 134)

└ [su-lopaḥ]¹⁸²

‘saḥ’ という語の格語尾 “su” は, あとに母音がつづく場合, 無音化する。もし無音化によって, 詩の行 (pāda) が完全になるならば。[例えば]

semām aviddhi prabhṛtim (‘かかる汝はこの捧げものを嘉納せよ’, semām < sas imām, [Nos. 131, 31]).

saiṣa Dāśarathī Rāmaḥ. ‘彼こそはダシヤラタ王の息子ラーマなり’ (saiṣaḥ < sas eṣa-, [Nos. 131, 36])

訳註 例文の第一は, あとに ya īṣiṣe ‘それを支配する[汝]’ とつづき (RV. II, 24, 1a) 完全な ‘jagati’ line をつくる。第二は完全な ‘śloka’ line.

以上, VISARGA-SAMDHI おわり。